



『文選』は梁武帝の皇太子蕭統が、近習の文人達と共に周代から六世紀の梁代までの優れた詩文八百余を集めて、まとめ体系化したものである。隋唐時代、科挙で儒教の經典と共に詩賦が出題されてから、文章作法の規範として尊重された。

以降『文選』を研究する文選学が流行し、続々と注釈書がつけられた。本書はその一つで、呂延濟ら五人が注を施し、唐の開元六年（七一八）に玄宗皇帝に献上されたので「五臣注」という。わかりやすい注釈書として一般に広く読まれた。

掲出本は、全三十巻のうち巻二十の残巻。巻の始めと終わり

を欠き、残りの十四首を収める。

力強く端正な唐風の書体から、唐写本と見られてきたが、紙背（本紙の裏側）の大半に本紙の本文よりやや後筆で、具平親王が正暦二年（九九一）に撰述した『弘決外典鈔』巻第一が記されている事などから、平安中期の書写とされている。「五臣注」が成立した当時の原姿を伝える唯一最古の写本である。

『文選』の日本への伝来は早く、奈良時代には律令制のもと官吏候補生の必読書となり、平安中期、掲出書が書写された正にその頃、清少納言がその主著『枕草子』の中で「文は文集、文選」と文章の手本に本書を挙げたよ



「紙背の『弘決外典鈔』」

うに、王朝貴族に不可欠の教養となった。今日、我々が日々使う熟語の中にも夫婦・天地・故郷など「文選」出典の言葉が多く用いられている。

掲出本の本文には平安後期に書入れされた墨や朱の古調点があり、貴重な国語学資料となっているが、それらを眺めていると、大陸の先進文化を求めて止まなかった古人の情熱がひしひしと伝わってくる。

（天理図書館 吉成伸仁）

天理図書館のお知らせ Tel : 0743 - 63 - 9200 <http://www.tcl.gr.jp/>

◆平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）

○5月の休館日：3日～5日・29日

（本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）